

貫語本里子教餘師



頭書繪註解

實語教 童子教 餘師百全

書肆南壽堂梓

實語童子教



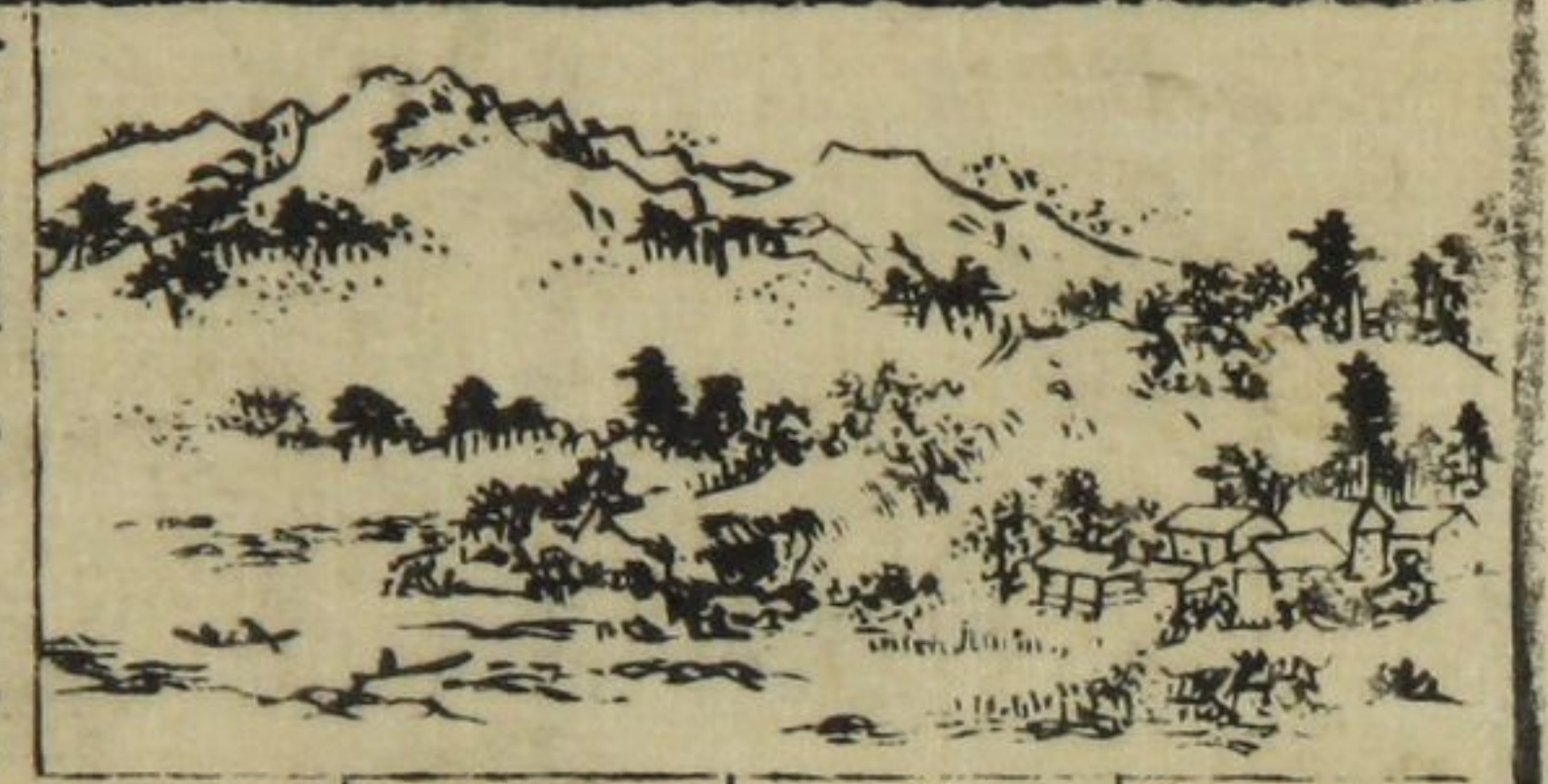
實語童子の二教
 ハ何人の作る事
 を知るは相傳へて
 云ふ法大師の作
 りといふ或ハ護
 命僧正の作とも云
 亦童子教ハ五大
 院の安然和尚の
 作とも云ふ俱小其
 真偽をまじらば
 ども古く童の爲
 作りも亦て教と
 ありものあらば是を
 誣謗とせざるべし
 あり強て文章を
 論ぜざるべし



實語教餘傳

此書は實語教の遺傳也。大般涅槃經卷第四十の末に
 ありし由りて法華經の地涌衆生に我今法華經の遺傳也と
 傳せしむるの旨を以て今此書を撰ぶ。其の旨は法華經の
 經卷第二十の末に法華經の遺傳也とありし由りて法華經の
 經卷第二十の末に法華經の遺傳也とありし由りて法華經の
 經卷第二十の末に法華經の遺傳也とありし由りて法華經の
 經卷第二十の末に法華經の遺傳也とありし由りて法華經の

山高が故小貴
 樹有と以て貴
 と爲



山高が故小貴
 樹有と以て貴
 と爲

人肥さる故貴
か不
智有と以て貴



財
富是一生の

山は肥るなりはては元は山の肥るなりは何れの山も
るたとの移木なりては移木もまた人の山も

とをかるゆへに不きとせらるなり今そのごとく容は方か不肥
ともいづる小体もなき美智者かたやぶとふわは機あ

放散歌の徒なりきり人の智をとりてを不
のりてりたりより仁徳に智のまもりたる人

物格の所智至智玉両意儀とわけて是れ物との
むりぬの智より首より足は非謂之智とも智の事の可

吾とて人のより儂なるは人の身は仁徳先
もつて第一とせらるると今元亨教書の智通論に

富是一生財身減即共減

身減もさ六則

共減す

智は是万代の

財

命終もハ即隨

て行



玉磨不バ光

無

智は是万代財命終即隨

富は金銀珠玉の財は富の富は一生の財は
はては身減もさ六則は即隨て行

と云ふは智は是万代の財は命終もハ即隨
孔子の命終もハ即隨て行

ゆへに富は命終もハ即隨て行
ゆへに富は命終もハ即隨て行

かたは富は命終もハ即隨て行
かたは富は命終もハ即隨て行

玉不磨不バ光

光無と石瓦

と爲

人學不バ智

無

智無と六愚人

と爲



倉の内財ハ

朽と有

人學不バ智 志有る愚人

光の如く石瓦の如く、光は無くとも石瓦は有る。人の學ぶに於て、智は無くとも志は有る。志有るは愚人の類なり。

人の學ぶに於て、智は無くとも志は有る。志有るは愚人の類なり。光の如く石瓦の如く、光は無くとも石瓦は有る。

人の學ぶに於て、智は無くとも志は有る。志有るは愚人の類なり。光の如く石瓦の如く、光は無くとも石瓦は有る。

人の學ぶに於て、智は無くとも志は有る。志有るは愚人の類なり。光の如く石瓦の如く、光は無くとも石瓦は有る。

倉内財ハ朽ト有

身の内の才ハ

朽と無



千兩の金と積

と雖

一日の學子ハ

如不

雖積千兩金不如一日學

千兩の金は積むに一日の學に劣る。一日の學は積むに千兩の金に劣る。學の功は積むに劣る。

一日の學は積むに千兩の金に劣る。學の功は積むに劣る。千兩の金は積むに一日の學に劣る。

兄弟常に合不ト慈悲と兄弟と為

財物ハ永く存世不才智と財物と為

四大日日日不心神夜夜に暗



兄弟常に合不ト慈悲と兄弟と為

兄弟骨肉の中もつひあはれぬ。私合せぬのあはれを
いと兄弟のあはれをあらはせしめんとすまはるるやうに
私合せぬがかりこそを兄弟のあはれをあらはせしめんとすまはるるやうに

字彙不不心神夜夜に暗

財物ハ永く存世不才智と財物と為

財物ハ永く存世不才智と財物と為

四大日日日不心神夜夜に暗

四大日日日不心神夜夜に暗

四大日日日不心神夜夜に暗

四大日日日不心神夜夜に暗

四大日日日不心神夜夜に暗

四大日日日不心神夜夜に暗

幼少時不勤學

不バ

老て後不恨悔

と雖

尚益とる所

有と無



故書と讀で

倦と勿き

學如不怠る時

眠と除て通夜

誦せよ

飢と忍で終日

習



師小會と雖ど
學不バ

幼少時不勤學。老後難恨悔

尚益有とる所

曲に思て大書の所不怠る人。益有とる所。曲に思て大書の所不怠る人。益有とる所。

たうかく幼少時不怠る人。益有とる所。たうかく幼少時不怠る人。益有とる所。

おろいせし海海と止とる所。おろいせし海海と止とる所。

故書も勿倦學まじ勿怠る時

除眠通夜。飢忍。終日習

故書も勿倦學まじ勿怠る時。故書も勿倦學まじ勿怠る時。

夜はあつた。夜はあつた。夜はあつた。

食物の印も。食物の印も。食物の印も。

と云ふ。と云ふ。と云ふ。

雅會師學徒如白布人

財無人の爲ふ

者

猶霜の下に花

の如し



貧賤の門と出

ると雖も

猶霜の下に花
富貴の門と出ると雖も
財無人の爲ふ者
猶霜の下に花の如し

以ての如く富貴の家に入るを以ては人を知るに如く
花の如く霜の下に花の如く解けしむるに如く

富貴の如く入るとも貧賤の如く出るとも
人の如く入るとも貧賤の如く出るとも

人の如く入るとも貧賤の如く出るとも
富貴の如く入るとも貧賤の如く出るとも

富貴の如く入るとも貧賤の如く出るとも
人の如く入るとも貧賤の如く出るとも

唯心貧賤の門と出ると雖も
智有人の爲

智有人の爲

小者

宛泥中の蓮

の如し



父母ハ天地の

如く

師君ハ日月の

の如し

宛泥中の蓮
皇侃が蓮の如く
泥中の蓮の如く

泥中の蓮の如く
父母の如く天地の如く

父母の如く天地の如く
師君の如く日月の如く

師君の如く日月の如く
宛泥中の蓮の如く

父母ハ天地所表ル日月

父母の如く天地の如く
師君の如く日月の如く



親族ハ譬ハ葦
の如ク
夫妻ハ猶瓦の
如ク



父母ハ朝夕
孝セ
師君ハ昼夜
小仕



又地ハ陰と陽とて一なるものなり
父母ハ天地の如く一なるものなり
父母ハ君の如く一なるものなり
父母ハ師の如く一なるものなり

親族存志華夫妻猶瓦也

親族ハ譬ハ葦の如ク
夫妻ハ猶瓦の如ク
父母ハ朝夕孝セ
師君ハ昼夜小仕

父母孝朝夕師君在昼夜

父母ハ朝夕孝セ
師君ハ昼夜小仕
父母ハ朝夕孝セ
師君ハ昼夜小仕



友と交て淨人
事勿也



父と母と君と夫と人のついでに生むるものありて死するものありて
之を報ふべしは此の父と母と君と夫とついでに生むるものありて

故のありて○晋大夫欒共子曰民ハこれ不けんことを事
との事父を重んじて手ハ所を教たすの事

食ひて父を父とせしむるに食ひて母を母とせしむるに
食ひて君を君とせしむるに食ひて夫を夫とせしむるに

事つるに其の在るを以て則死と致すこと
あるものついでに生むるものありて死するものありて

交友勿得事
友ハ此のふたつを以て
以て友と交て淨人
事勿也

此の友と交て淨人
事勿也



已より兄への禮
敬と盡し

已より弟への愛
顧と致せ

人と而智無
者ハ

木石於異る
ら不

人と而孝無者
ハ

敵のどうとありて○孔子も晏平仲善人と交て之を
敬すとのさま程の操を以て交て之を敬すとのさま

己見重んずれば己を敬す

己を敬すれば己を重んずるものありて己を敬すれば己を重んずるものありて

己を敬すれば己を重んずるものありて己を敬すれば己を重んずるものありて

己を敬すれば己を重んずるものありて己を敬すれば己を重んずるものありて

人為智者者木石於異る

畜生於異多



三學の友小交
ら不バ

何を七覺の林
に遊ん



四等の無小棄
不バ

人の妻友を本またた畜生

今しよるものなりと云ふやあやうに無心なるものなり
あると云ふも同しせず智慧を以てしてあやうなり
と云ふ一又人といふまじき二教の善なる者の善しき
きなりと云ふや鳥はあやう反哺して恩返しを修む
と云ふ一これこそあやうと云ふことなり人のまじき
不考なる人會高よりをとり○白樂天が人は石ふ
わすれず情けあやうといひし人なるをあやうと云ふ
吾等大師の恩を思ふと云ふ人御書せしと云ふことなり

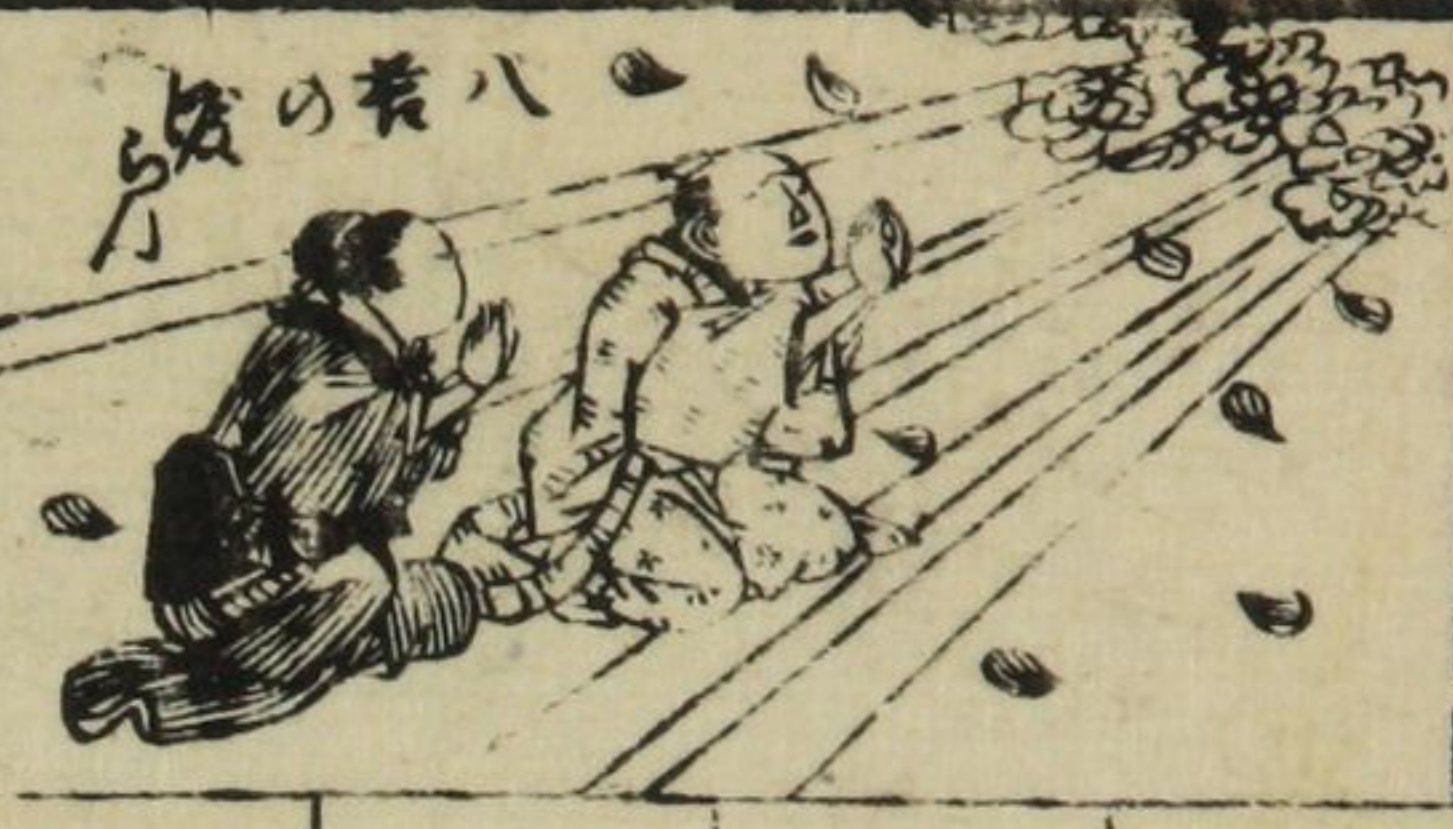
不妻不友何遊七覺林

いほん何遊の三學の戒學定學善學はたつたなり
佛の友何遊の戒學定學善學はたつたなり
出家の友何遊の戒學定學善學はたつたなり
七覺の友何遊の戒學定學善學はたつたなり
覺四の友何遊の戒學定學善學はたつたなり
あやうの友何遊の戒學定學善學はたつたなり
山林の友何遊の戒學定學善學はたつたなり

不妻不友何遊七覺林

實語餘師

誰ハ苦の海と
渡らん



八正の道廣
難と

四苦と八苦とを於の四と云ふ四苦と云ふを揚也
一夫定まると云ふは四苦と云ふは法也と云ふは
五種の苦也八苦と云ふは法也と云ふは
なり四十二章たは華嚴經と云ふは四苦と云ふは
八苦と云ふは八苦と云ふは八苦と云ふは八苦と云ふは
死苦と云ふは因愛別苦と云ふは不取不捨苦と云ふは
六入法也苦者なり此文の云ふ四苦の修はと云ふは
法也と云ふは八苦の修はと云ふは八苦の修はと云ふは
人間八苦の生死の海と云ふは八苦の修はと云ふは
おまをみるなりと云ふは八苦の修はと云ふは八苦の修は

八正道は十悪人不住

十悪の八住



無為の都樂
あのと雖も

八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは
八正の道は十悪の八住と云ふは八正の道は十悪の八住と云ふは

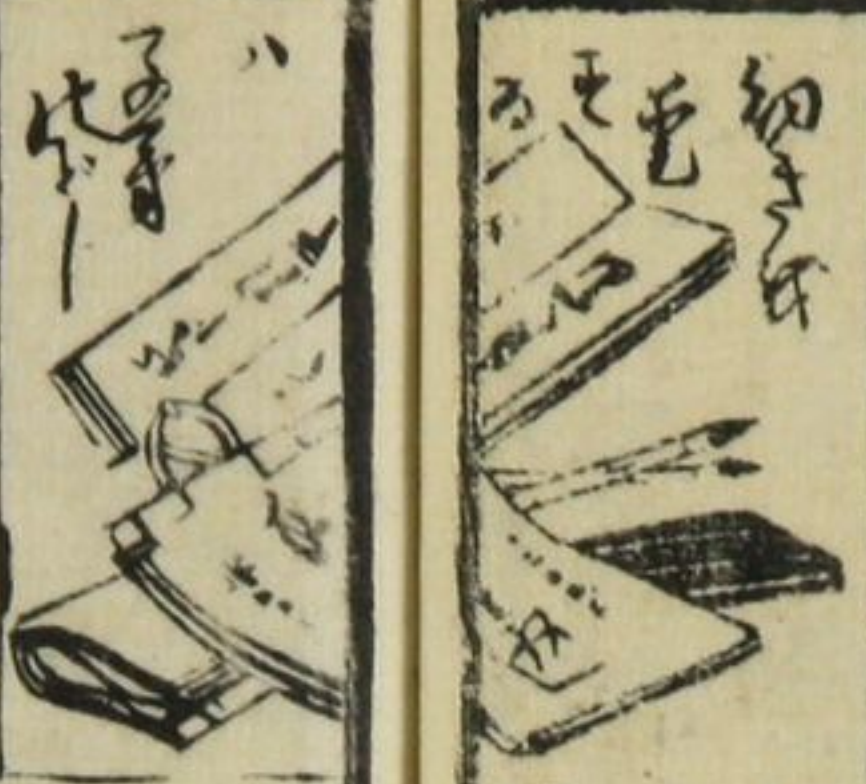
実乃た難樂放逸者不住

実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住
実乃た難樂放逸者不住

放逸の輩ハ遊す



老とを敬ふハ父母の如ク
幼とを敬ふハ子弟の如ク



我他人と於
敬他人亦我と
敬
己人之親と
敬
人亦己が親と
敬ふ

この世に生るるもの生死有るの世に
とあるを以て人の世の如く生るるもの生死有るの世に
たのしみ楽しみたりなりとありて放逸として居るもの
ゆるぎあつて悪事致はくるものにおぼしきなりとあり

敬老を父母を幼を子弟

年おひしる人を父母とせし我を幼とせし
あせしむるを子弟とせし我を老とせし
敬する人の慢と我の敬と又長幼の序と
の如く敬れば老はならずと我を幼とせしむる
ゆへに我を敬ふ海海ふれ子とせしむるは
○蓋し吾人を敬ふては人の親と我を敬ふては人の

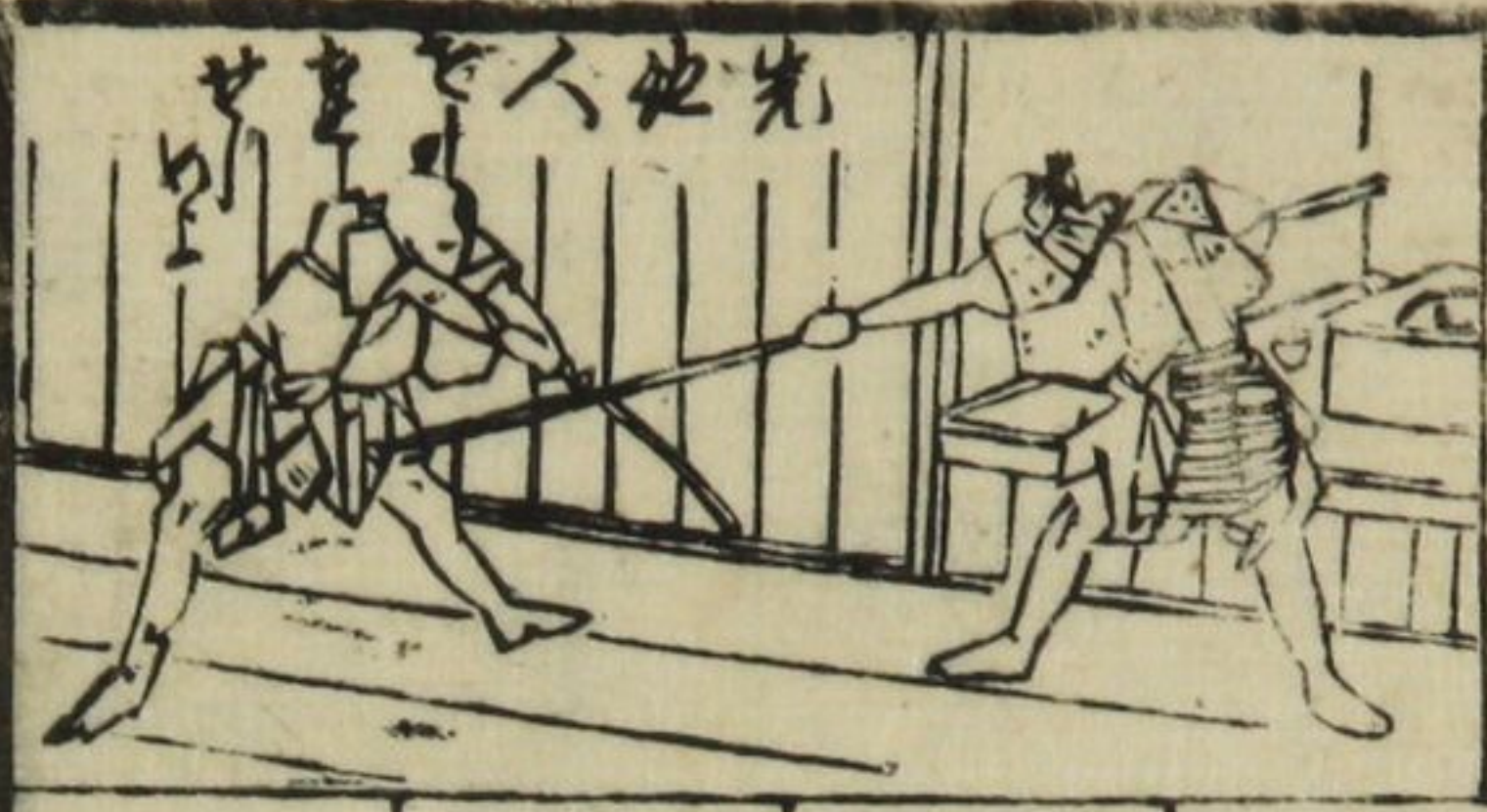
幼不及ぶ天下と云々
く我を敬ふては人の親と我を敬ふては人の

我敬は他人は亦敬我

己敬人之親人亦敬己親

家語の賢君は人をもて敬ふは人をもて敬ふ
とに似たりとありて人をもて敬ふは人をもて敬ふ
己人の親を敬ふは人をもて敬ふは人をもて敬ふ
本文の如くありて人をもて敬ふは人をもて敬ふ
あるもの人をもて敬ふは人をもて敬ふは人をもて敬ふ
あはれとありて人をもて敬ふは人をもて敬ふは人をもて敬ふ

己が身と達せんと欲する者ハ先他人と達せしめよ



仁義の修めあり。○殊喜曰。親戚の兄弟を以て不忠の事せず。是故。毒を兼て飲む事は。己の身を達せしめよ。○殊喜曰。親戚の兄弟を以て不忠の事せず。是故。毒を兼て飲む事は。己の身を達せしめよ。

欲達し身者先他人と達せしめよ

己が身と達せんと欲する者ハ先他人と達せしめよ。○殊喜曰。親戚の兄弟を以て不忠の事せず。是故。毒を兼て飲む事は。己の身を達せしめよ。○殊喜曰。親戚の兄弟を以て不忠の事せず。是故。毒を兼て飲む事は。己の身を達せしめよ。

他人之愁哉 見てハ 即自共小患

見他人之愁即自共小患

他人之喜哉 聞てハ 則自共小悦

他人之喜哉。聞てハ。則自共小悦。○殊喜曰。他人の喜を聞てハ。己の喜を得。他人の愁を見てハ。己の患を得。○殊喜曰。他人の喜を聞てハ。己の喜を得。他人の愁を見てハ。己の患を得。



他人之喜哉。聞てハ。則自共小悦。○殊喜曰。他人の喜を聞てハ。己の喜を得。他人の愁を見てハ。己の患を得。○殊喜曰。他人の喜を聞てハ。己の喜を得。他人の愁を見てハ。己の患を得。

善と見て八速
行ひ
悪と見て八忽
避よ

善と修むる者
八福と蒙る
譬ハ響音の音不
應ホラガ如し
悪と好者ハ禍
と招く

見を善と速く見を悪と忽避

ふのたて成りては善と見れば速く見れば悪と見れば忽避

○論語曰く人を知るは其の徳を知るに在り其の徳を知るは其の徳を知るに在り

修を善と速く修を悪と忽避

好を善と速く好を悪と忽避

ふのたて成りては善と見れば速く見れば悪と見れば忽避



富のやと雖貧
と志るゝと勿也
貴と雖も賤松
忘るゝと勿也
或始ハ富で終
は貧
或先ハ貴
後賤

雖富のやと雖貧

或先ハ貴後賤

ふのたて成りては善と見れば速く見れば悪と見れば忽避

ふのたて成りては善と見れば速く見れば悪と見れば忽避



夫習難く忘

易ハ

音聲之淳

如

又學易ノ忘

難ハ

書筆之博

藝

但食有ハ法

有

亦身有ハ命

有

猶農業と忘

不

必學文と廢

する工莫



ふわくたゞざらぬり後の方けわりのことありけり
多のざらりし今をばわあまがくくつるものありけり

くわくわくとくせいのあそふふやまゝ進んぬるものあり
抑りくわくわくとくせいのあそふふやまゝ進んぬるものあり

○易ノ君子ハ安而危と忘ル存而亡とを忘ル
易ノ君子ハ安而危と忘ル存而亡とを忘ル

夫雅習易也忘書者鮮之淳文

又易字難忘書者筆博也

夫易字難忘書者筆博也
易ノ君子ハ安而危と忘ル存而亡とを忘ル

但食有ハ法亦身有ハ命

猶農業と忘不

必學文と廢する工莫

必學文と廢する工莫

必學文と廢する工莫



故未代の學

者

先此書と案

亦可



是學問之

始

身終すて忘

失らるる勿



行農と書
 故未代の學
 者
 先此書と案
 亦可
 先書
 是學問之始
 身終すて忘
 失らるる勿
 是書
 故未代學者出入可案は書

故未代學者出入可案は書
 先書
 是學問之始
 身終すて忘
 失らるる勿
 是書

是學問之始身終すて忘失らるる勿

是學問之始
 身終すて忘
 失らるる勿
 是書



夫貴人の前お居かてん

顯露あらわずしたまはなし

得えずしたまはなし



道路みちにあひあひあつたまはなし

召事しやうじ有あるはじやうに

兩ふたのてとむねを

當あてて向むかふ

不たげなくしたまはなし

仰おほせにたまはなし

院安然和尚海湯小居候ありと云ふ事なきを尋ねては
此の御座り候はしむ候と云ふ事なきを尋ねては

此の御座り候はしむ候と云ふ事なきを尋ねては
此の御座り候はしむ候と云ふ事なきを尋ねては

夫貴人前居て

顯露あらわす

得ずし

道路に

召事有はじやうに

兩のてとむねを

當てて向かふ

不たげなく

仰せに

仰有は謹で

不問者答

仰有は謹で

聞



三寶亦ハ三禮

紙盡

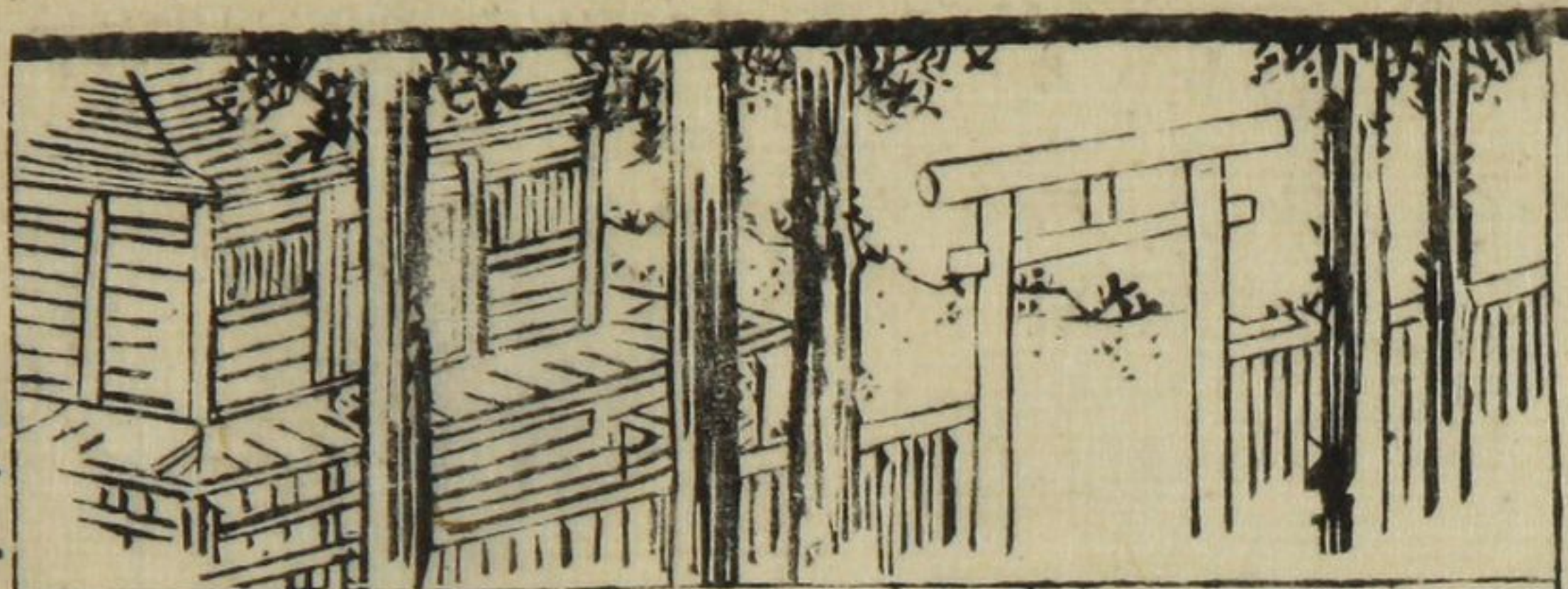
神明亦ハ再

拜と致せ

人間亦ハ一禮

と成

師君亦頂戴



大可

向きまふとすちてあふ登り又何れも作めぬ極之極
とたりん 礼記曲禮篇曰先生不道不遭不趨正立
拱又云礼奉者ハ心亦當又云同不致て對す
と終て對して何てこまの禮ハ礼儀化法といふ

三寶盡て礼儀の儀

人間成一禮亦亦可成

三寶亦ハ三禮
紙盡
神明亦ハ再
拜と致せ
人間亦ハ一禮
と成
師君亦頂戴

と意とと此業とくやま相紙わう手取智為倫も
法ハ本なり為と信を本手なりぬ二神とて礼の
かどと手なりつぎ本神ハ信家よりいも併と本礼と
一神と無述と手あり紙和光回塵といそ也
の神なり一礼亦ハ再拜ハ本礼と無述とのかりなり
と一唯一の神なりとハ再拜の地やび相と
ゆ再拜といふ神ハ天地の二氣なり今を法陽の氣
とて生ずるゆ二氣と成とて再拜する形の家
童子亦教のくすくも弘神と愛するをみる
わかち礼三神の儀とめははるハひさから礼
亦一禮とさせと通途の礼なり又師君亦人
と頂戴とてまがわうとすけい



墓と過る時ハ

則慎め

社と過る時ハ

則下ふ



堂塔之前に

向て

不淨と行ふ

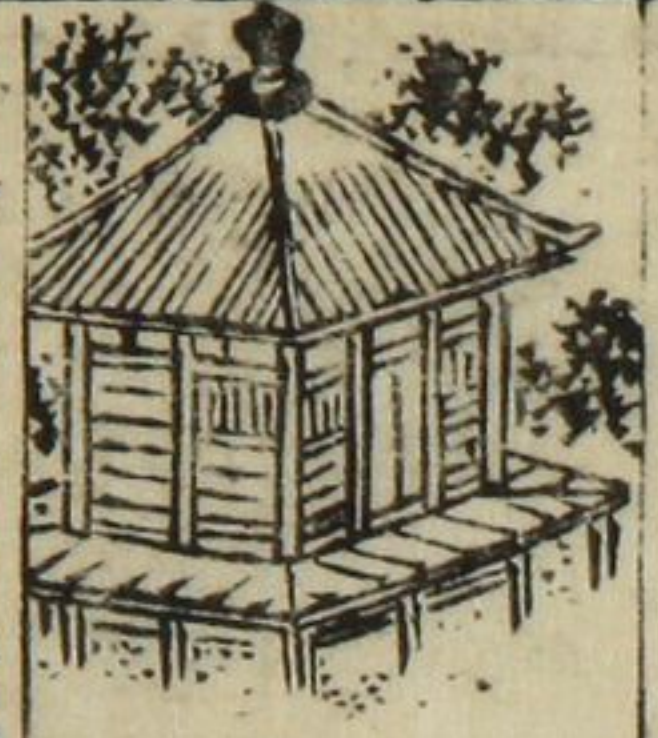
可不

聖教之上へ

向し

無禮と致す

可不



人倫不者禮

有

墓と過る時ハ 則慎め 社と過る時ハ 則下ふ

道墓時則法 社時則下

墓人の具位紙をせり 墓を過る時ハ 社と過る時ハ 則下ふ 堂塔之前に 向て

堂塔と云ふは 佛の塔なり 佛の塔を過る時ハ 社と過る時ハ 則下ふ

向聖教之上へ 不淨と行ふ

聖教之上へ 佛の塔なり 佛の塔を過る時ハ 社と過る時ハ 則下ふ

聖教の上へ 佛の塔なり 佛の塔を過る時ハ 社と過る時ハ 則下ふ

聖教の上へ 佛の塔なり 佛の塔を過る時ハ 社と過る時ハ 則下ふ

聖教の上へ 佛の塔なり 佛の塔を過る時ハ 社と過る時ハ 則下ふ

人倫者禮を 朝廷必有法

朝廷ハ必法
有
人ト而禮無
者
衆中又過
有



衆不交て雜言
不
事畢者速
避
事不觸て朋
違不
言語離るを
得不



人尊禮者礼中又有

人倫と天下の万民との交わりは、氏と名とを以てして、人として
まがひあひあはさむべきに、法は定規とならざるものなり。是
れが、うらむをまらして、天下のうらみなり。天下國家をたも
たまふ者、おのづかひに法は定規とならざるものなり。是
れが、うらむをまらして、天子のうらみなり。天子のうらみ、おのづかひに
法と諸侯、卿大夫士庶人まで、おのづかひに、上一人の
法が、おのづかひに、天下の万民まで、おのづかひに、
と人倫、おのづかひに、朝廷、おのづかひに、法は、おのづかひに、
の、おのづかひに、おのづかひに、おのづかひに、
おのづかひに、おのづかひに、おのづかひに、
おのづかひに、おのづかひに、おのづかひに、

事畢者速避

事不觸て朋

事畢者速避
事不觸て朋
違不
言語離るを
得不



語多者ハ品少

語多者ハ品少

夫は言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 なるは言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 和合するやうにせむと其の言のありふらぬやうにせむと
 のことばをばせむと其の言のありふらぬやうにせむと
 夫は言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 なるは言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 和合するやうにせむと其の言のありふらぬやうにせむと
 のことばをばせむと其の言のありふらぬやうにせむと

老るる狗の友と
吠か如し



老るる狗の友と吠か如し
 夫は言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 なるは言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 和合するやうにせむと其の言のありふらぬやうにせむと
 のことばをばせむと其の言のありふらぬやうにせむと
 夫は言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 なるは言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 和合するやうにせむと其の言のありふらぬやうにせむと
 のことばをばせむと其の言のありふらぬやうにせむと

夫は言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 なるは言ふに過ぎたるは其の言のありふらぬやうにせむと
 和合するやうにせむと其の言のありふらぬやうにせむと
 のことばをばせむと其の言のありふらぬやうにせむと

懈怠の者ハ
食と急ぐ

疲る猿の菓
と貪ぐ如し



勇者ハ必危
有

夏虫の火に
入り如し

鈍者ハ又過
無

春鳥の林に
遊ぐ如し



人の耳ハ壁に
付

懈怠者食後必多菓

けいひんちやうつごせいでいごうふすはひまの
けんいんちやうつごせいでいごうふすはひまの

朝夕の竹會不扱るははるはる核不たふさ
菓食貪ぐいとぐりたといののののの

ささゆりしるる○土曜經云強弱は
しるる菓食強弱は

勇者必危夏虫如入火

鈍者又過春鳥如遊林

勇者不怯敵の勇血氣の勇とてはるのたやわうは敵の勇
と忠節をむひて功なきとまらざる敵のたてふ

才が節とまらつて名とのことなれは又血氣の勇とてはる
仁義なき智深も形もなきはとてはる

てわうそいたうそは敵は敵といはるはる血氣の勇とてはる
ていなりとの血氣よとてはるのたやわうは敵の勇

勇者といふは山山谷谷清く不花不葉不花不葉と
甘んじりるものあらかり又此者なりとてはる

わさちともあつてはるはるはるはるはるはるはるはる
おとつてはるはるはるはるはるはるはるはるはる

今耳者必密容あり終末

密而も讒言
とる事勿

人の眼者天

小懸る

隱而も犯用

と勿

車ハ三寸の

轄を以

千里の路を

遊行す

人ハ三寸の舌

と以

五尺の身を破

損す



口ハ是禍之

門

舌ハ是禍之

根

人眼者天隱而も犯用

人の眼ハ家の窓とてあるものごとくしてまじき言を
おひしの糸けいごとくばつて何れもまじき言をたうとて

かり又人の眼ハ天のまじき言をたうとてまじき言をたうとて
とて悪事を犯用とてまじき言をたうとてまじき言をたうとて

とて天ハたうとてまじき言をたうとてまじき言をたうとて
まじき言をたうとてまじき言をたうとてまじき言をたうとて

車以三寸轄造り千里路

人心三寸舌損む人身

車は三寸の舌の轄を以て千里の路をゆめりしするもいふ
まじき言の功ありと人の舌をたうとてまじき言をたうとて

破損せらるる舌ハ三寸の舌を以て五尺の身を破損せらるる
破損せらるる舌ハ三寸の舌を以て五尺の身を破損せらるる

又依知大車轄を以て千里の路をゆめりしするもいふ
又依知大車轄を以て千里の路をゆめりしするもいふ

とのあり又史記の張良が世をたうとてまじき言をたうとて
師より又素隱云舌ハ口ハ舌を以て長三寸舌を以て長三寸

口は是禍之門

舌は是禍之根

童子餘市

口と使鼻の如
 かり使者
 身終まで敢
 事無



横 この字を
 過言一たび出
 せ者

馬追と舌奴
 返不



白圭の玷
 磨可
 惡言の土ハ
 磨難

かろくの惡事といふ事なるは入るなりとあるは
 家の門分たたくて見せしものつゝの形や又我ハ其の
 ことこの生る根本なりからぬよき人の根とて
 まで教さるん悪事ハ何んまでたとなりあてとらけつそら
 のよぶなりけりてあきまゝなることにて其基甚苦蔭の
 の虎牙と害 若し殺命と絶口とて鼻の如くたつ
 一死を後処置とらるるなり ○家語云 能く能く
 心の根かり 只こまゆを傷る徳の門也とあるは
 ろく口舌とけりていふことなりとらるる

善事一止者馬追と舌奴

る事なるは一たびのひのちまやまの事なるは一たびのひのち
 りがまきと細馬とのむまふて追と舌奴の舌奴たひ
 かすことなるは一たびのひのちまやまの事なるは一たびのひのち
 けりていふことなりとらるる ○家語云 能く能く
 輪語我引とていふ事なるは一たびのひのちまやまの事なるは一たびのひのち
 文字のやまふ事なるは一たびのひのちまやまの事なるは一たびのひのち
 みる事なるは一たびのひのちまやまの事なるは一たびのひのち
 性なるは一たびのひのちまやまの事なるは一たびのひのち

白圭の玷磨可惡言の土ハ磨難

白圭の玷磨可惡言の土ハ磨難
 白圭の玷磨可惡言の土ハ磨難
 白圭の玷磨可惡言の土ハ磨難
 白圭の玷磨可惡言の土ハ磨難

童子餘市



無 禍福者門よ
唯人の招所
不在
天の作る災ハ
避ぬ可

難
自作の災ハ
難
餘
夫積善之家

必餘慶有
又好惡之
處

あることのありきと成りのまじいといわぬを
ことなるべしびのふのむふなりがことなる
白圭の張るるの尚慶を一新書の記するは
よとありてその自善の功を南窓一日ふこと
ふりてよとありて成りて孔子の兄に
あふふりてよとありて成りて孔子の兄に

禍福者門よ唯人主不拒

天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可

天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可
天の作る災ハ避ぬ可

夫積善之家必餘慶有

又好惡之處

又好惡之處
又好惡之處
又好惡之處
又好惡之處
又好惡之處
又好惡之處
又好惡之處
又好惡之處
又好惡之處
又好惡之處

必餘殃有

人而陰德

有必陽報有

人而陰行

必照名有

矣



信力堅固の

災禍の雲起

念力強盛の

家入

こゝにひのやして多き子孫ふさゆなり又悪とあつて
とてりふかき天のけりともはかきあひひりまぬ
身ごさるぐの殃ありけり易文言曰積善の家必
餘の慶あり不徳と徳家必照の殃ありとてり

人有陰德必有陽報矣

人有陰行必有照名矣

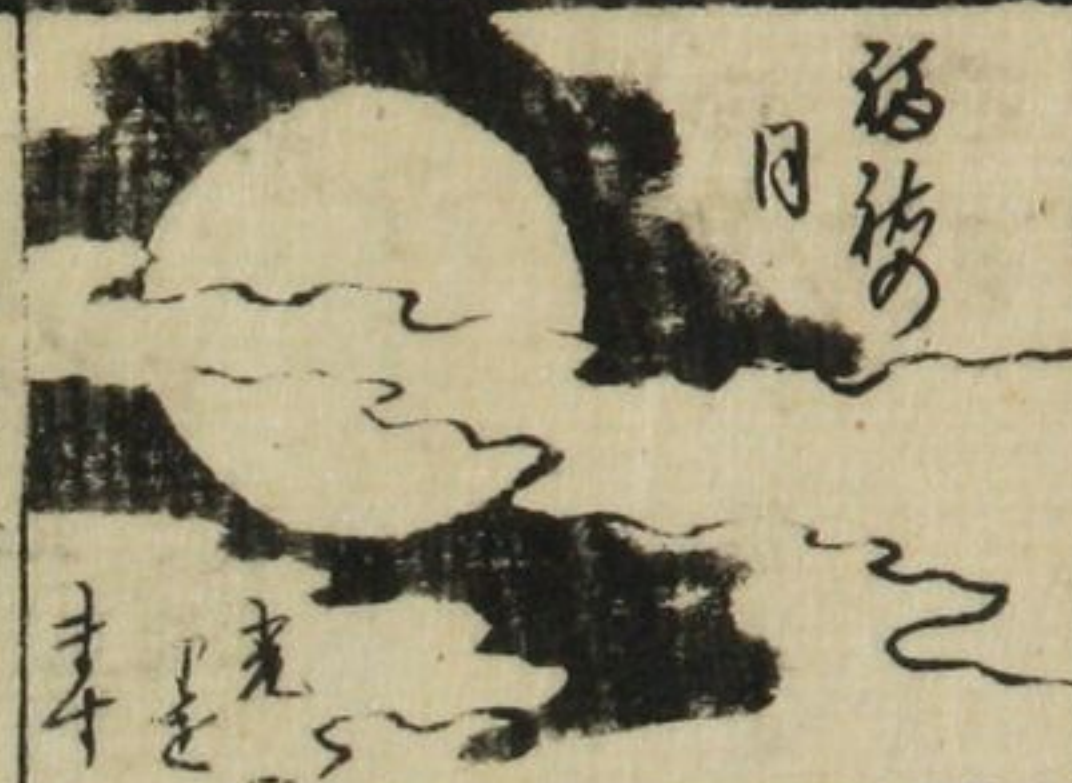
陰徳と人のあつて油の油とけり及て紙たむひる
との形のあつて油の油とけり及て紙たむひる
かふあつて油の油とけり及て紙たむひる
たあつて油の油とけり及て紙たむひる

信力堅固の四字ハ法華經方便品云云
念力強盛の四字ハ法華經方便品云云
信力堅固の四字ハ法華經方便品云云
念力強盛の四字ハ法華經方便品云云

信力堅固の四字ハ法華經方便品云云

念力強盛の四字ハ法華經方便品云云

福祐の月光と増



心の同不八面
の如く
壁の水の器
随が如く



他人の弓と
他人の馬
不
不

かきつひとむるの海海辱始ふ災ハ一息我天大なり
徳を忠貨災害なりと仰念力強盛と六佛祿の念

力方の厚くさかするとのきり福祐と六徳とのきり
積たすころなり易ふ大有の上九天より一息を徳訓せ
ふるまふと何ぞ本文不後祐の月ふたと災徳と雲ふ
きとくは福祐紙むひかすのの災徳なるゆへなり
日本地祇代考考不祐のといひせざる成りよりの言ひと徳心
比八天の徳まり災徳の雲と色マとせ後祐の月光を徳と

今月も面壁如水浄矣

人の心よきのよのふす人のつれもむねと人ののふかた
かりゆき人代面のののふかたのふと何ト又人のふ紙
水もきとくのふす人のふかたのふかたのふかたのふかた
ゆかたのふかたのふかたのふかたのふかたのふかた
まうとせり人のふかたのふかたのふかたのふかた
やうとせり人のふかたのふかたのふかたのふかた

○九條よき考人人心同くとも其面の如く吾堂教
引が面と吾面の如くたせと絹手後漢書ふ尸云云君
村の如く民ハ家の如く村方るると災もも方なり
園かると災もも山かると

不批他人弓不汚他人馬

あまふ徳の人のどうなるか紙がふかたのふかたのふかた
こそしむくまてなり弓も馬もかたのふかたのふかた



前車之覆板

見てハ

後車之誠と

爲

前事之志

不

後事之師と

爲



童子余師

童子余師

〇明心堂世太公武王少卿云他の事
挽くは好と七知と千他の馬小騎と依愛とを
他門関は他の弓矢ひくこと能く是他の事あること
他の事と愛んぶりと事と人の子と事と事と事と事

前車とは後車との氣

前車とは後車との氣

車の名は... 後車は... 前車は...

小車は... 大車は... 後車は...

買難く... 後車は... 前車は...

とみて... 後車は... 前車は...

いす... 後車は... 前車は...

車の... 後車は... 前車は...

後... 後車は... 前車は...

どの... 後車は... 前車は...

善立而名
流
寵極而禍

長生天皇御宇の御多



善立而名、流、寵極而禍、
長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、

長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、

長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、

長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、

長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、

長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、

長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、

長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、

長生天皇御宇、御多、
長生天皇御宇、御多、



長生天皇御宇

童子録

人ハ死而名と留め

虎ハ死而皮と留む



國土と治る賢王ハ 賢寡と侮と 勿美



人死而名存虎死而皮留

人ハ死して名存らば後世の爲に功績の遺るるを以て名と爲す虎ハ死して皮を留むるは其の皮を以て爲す也 賢者ハ死して其の徳を遺るるを以て名と爲す愚者ハ死して其の行を遺るるを以て名と爲す 賢者ハ死して其の徳を遺るるを以て名と爲す愚者ハ死して其の行を遺るるを以て名と爲す

賢王ハ賢寡と侮と

賢王ハ賢寡と侮と 賢者ハ死して其の徳を遺るるを以て名と爲す愚者ハ死して其の行を遺るるを以て名と爲す 賢者ハ死して其の徳を遺るるを以て名と爲す愚者ハ死して其の行を遺るるを以て名と爲す

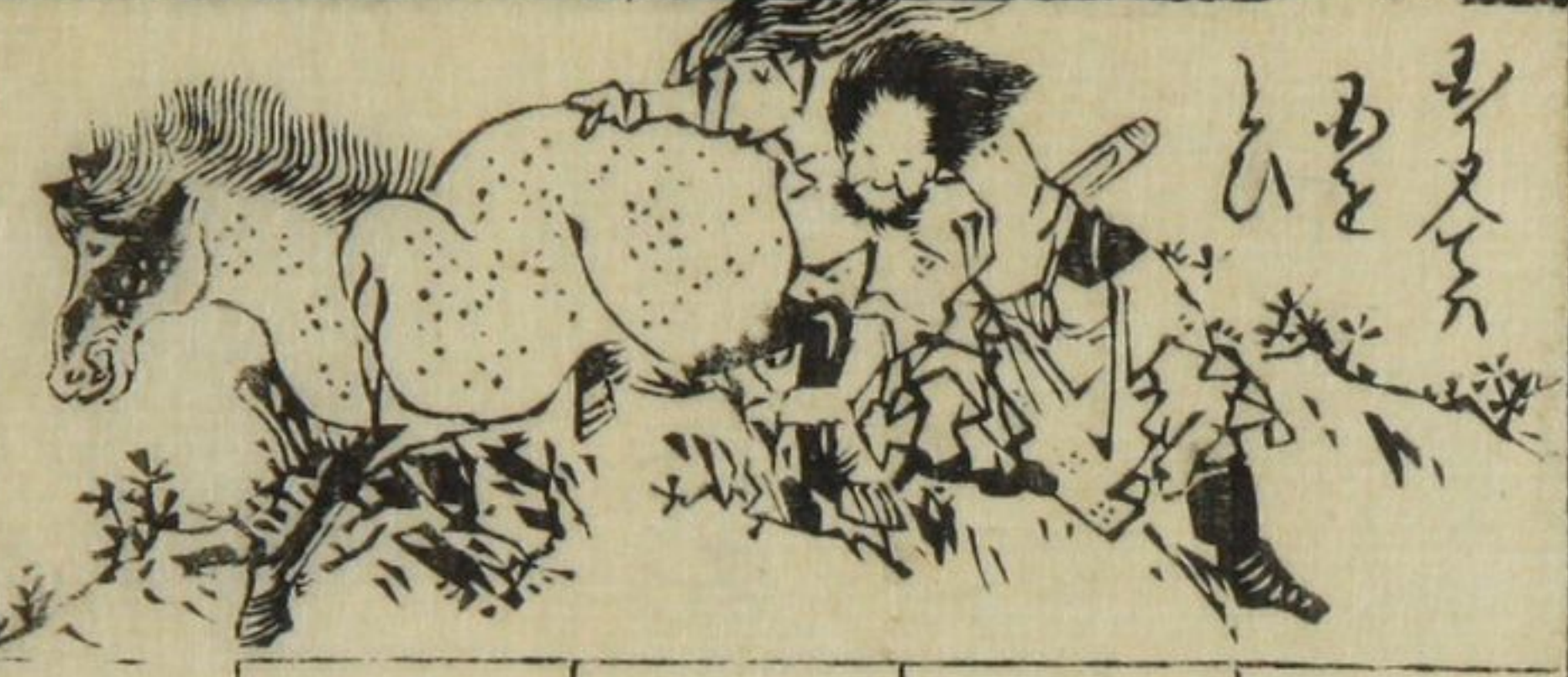
童子録

廿一

君子人と譽
不バ
則民怨
作
美



境不入而八禁
と問



君子と不譽人則民怨也美

君子と不譽人の名なりと君子の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の

○禮記曰君子曰と彼人譽ぶると此則民忠と他と云
と則覺賢が統のや云按じらふ此の意を以て礼記の
ことより君子と云ふは万民の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の

童子教の文ハその義ありたりなりと云々

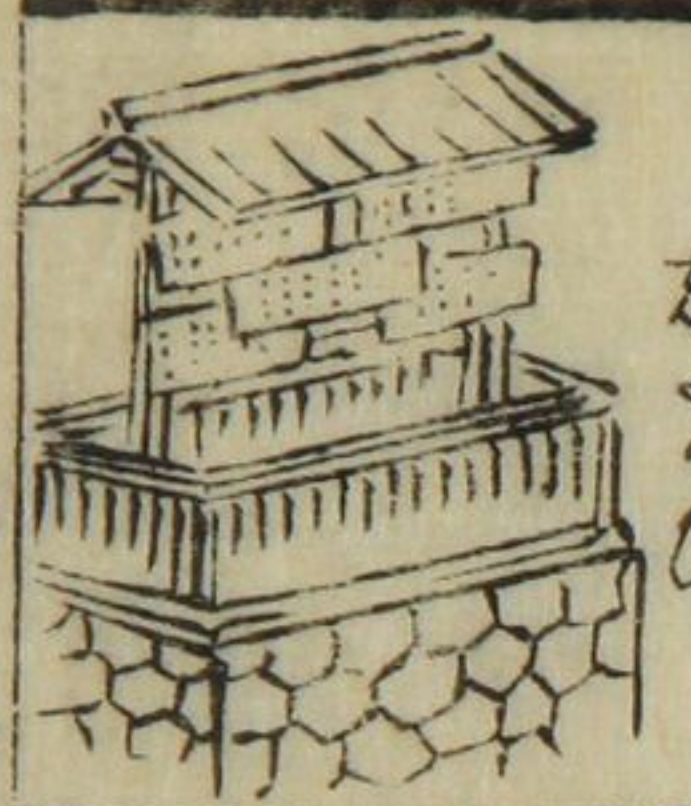
○愚按じらふ此の義不可なるなりと云々又と云々
ためて云々云々と云ふ君子と云ふは君子の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の
徳を以て人衆を服するは君子の徳を以て人衆を服するは君子の

入境而八禁

國不入而八國と問
郷不入而八郷
俗不入而八俗
不隨ひ
門不入而八門
と問ふ
主人と敬んが
鳥也
君所不私の諱

入郷る路以入侯の隨依
入門る同律侯級と人
君本を私諱と二

此の城不入と... 制神の本... 侯侯ひまの法...
不むるぬやう... 國不入... 侯侯ひまの法...
入る一郷の他法... 侯侯ひまの法...
のたひ風俗... 侯侯ひまの法...
家のあり... 侯侯ひまの法...
又君所不私の諱... 侯侯ひまの法...



無
二の尊号無
也
愚者八遠慮
無
必近憂有
可

愚者者遠慮必可有近憂

ある倫語の... 侯侯ひまの法...
のふ足下... 侯侯ひまの法...
すつてなり... 侯侯ひまの法...

管と用て天と
窺が如し

針と用て地と
指不似たり



神明ハ愚人と

罰す

殺火非テ懲
令が爲かり

如用管窺天似用針指地

管は地の中を穿りて天を窺ふ如く、針は地の表を指して天を窺ふ如く、
管は地の中を穿りて天を窺ふ如く、針は地の表を指して天を窺ふ如く、
管は地の中を穿りて天を窺ふ如く、針は地の表を指して天を窺ふ如く、
管は地の中を穿りて天を窺ふ如く、針は地の表を指して天を窺ふ如く、

神明罰愚人非殺火爲懲

神明は愚人を罰す、殺火は愚人を懲らさず、
神明は愚人を罰す、殺火は愚人を懲らさず、
神明は愚人を罰す、殺火は愚人を懲らさず、
神明は愚人を罰す、殺火は愚人を懲らさず、

師匠の弟子と打ハ

師匠の弟子
と打ハ
悪ハ非テ能
令が爲かり



師匠の弟子と打ハ、悪ハ非テ能令が爲かり、
師匠の弟子と打ハ、悪ハ非テ能令が爲かり、
師匠の弟子と打ハ、悪ハ非テ能令が爲かり、
師匠の弟子と打ハ、悪ハ非テ能令が爲かり、

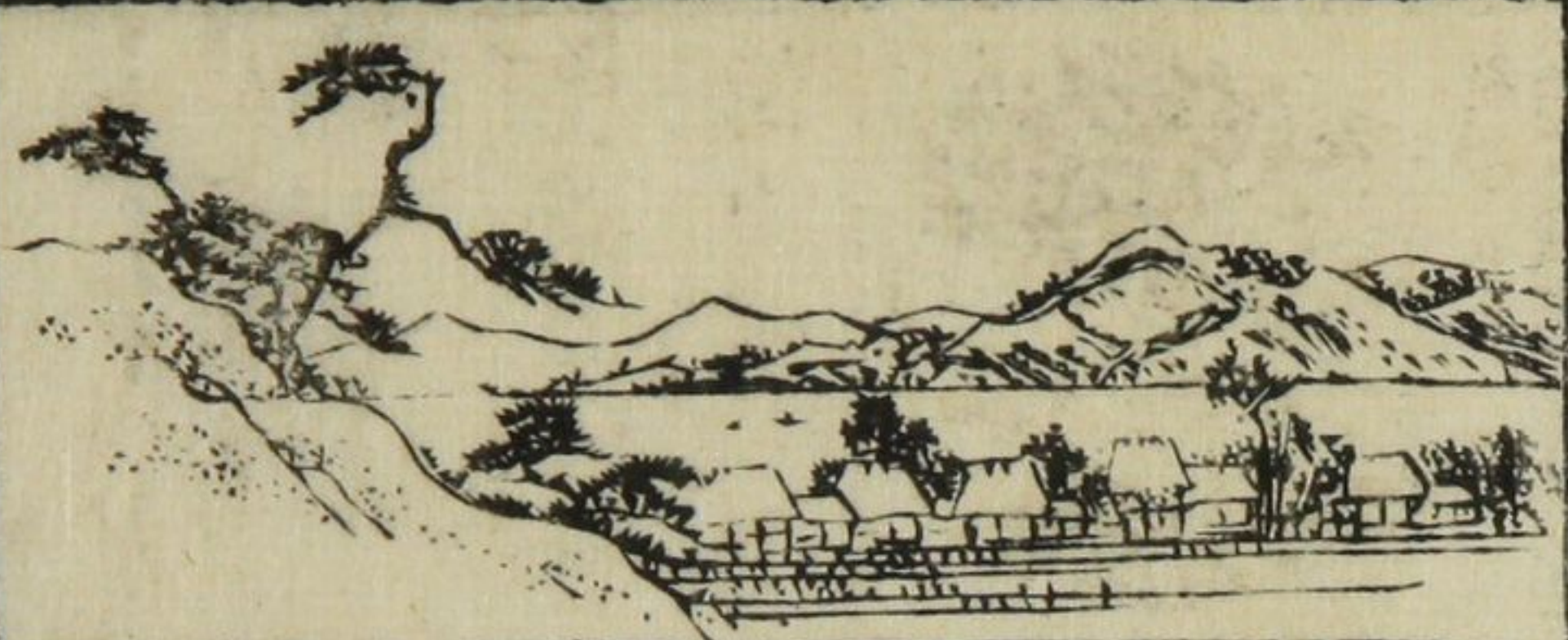
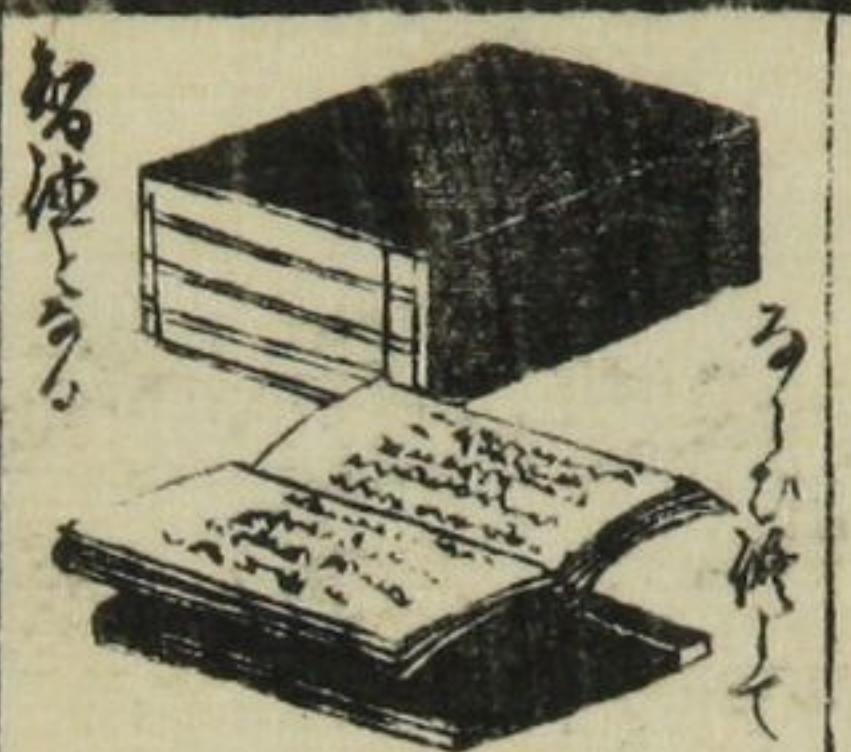


生而貴者ハ

無

習修して智

徳と成



貴者ハ必富

これの不慮を遂げざる孔子原壤が是とかなるの言ひに
 ぞれと云はるは原壤の言はるるにあらざるをいふ也
 といふ事をもつたは乃ち必富と云ふは必ず富むる事なり
 わるべきものもあらずやとて之を疑ふは疑ふ事なり

生而貴者必富。富者必貴。貴者必富。

貴人といふは必ずしも富むる者ならずとも
 徳を以てして人を知る也。○賢者が抄書するに
 倫理の事をもつたは必ずしも徳を以てして人を知る也
 多の事なくとも必ずしも徳を以てして人を知る也
 少の事なくとも必ずしも徳を以てして人を知る也

及ぶが如く其の賢者なりあるは必ずしも世間の徳教をもつたは
 其の言の忠告の道は精進の道に依りてするなり

○孔子の智徳も其のつとむるなりと云ふ也
 ○孔子曰天子は天子も士も士も天下にけるなり

貴者とは必ずしも富むる者ならずとも
 其の言の忠告の道は精進の道に依りてするなり

経書に任をたれりするの事なれば必ず佛國に入るなり
 智徳は必ずしも富むる者ならずとも

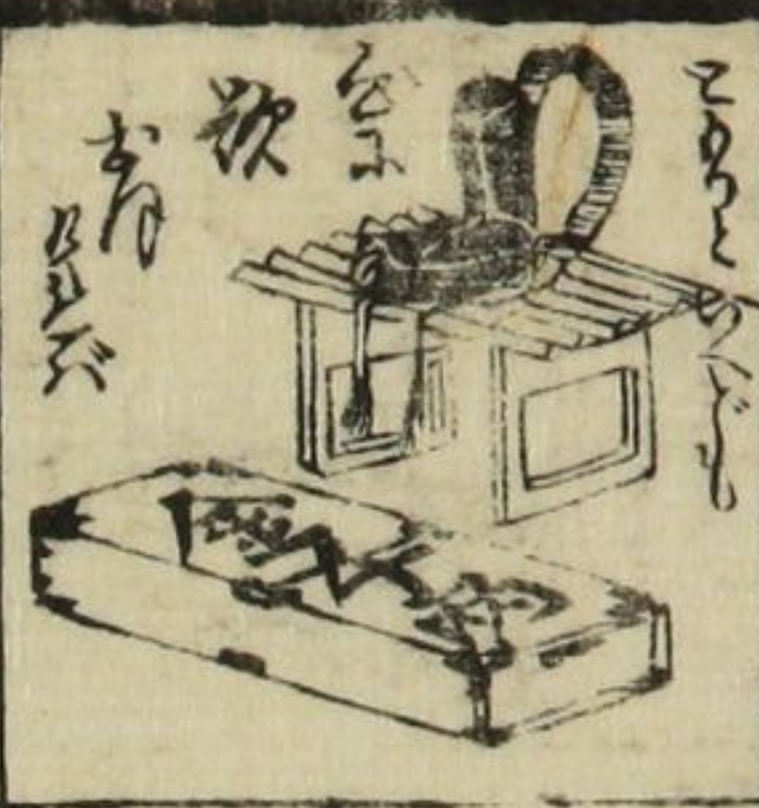
上は必ずしも富むる者ならずとも
 其の言の忠告の道は精進の道に依りてするなり

貴者ハ必富。富者ハ必貴。貴者ハ必富。

富者ハ未必

貴用

困



富りと雖心に

欲多ハ

是と名て貧

人と爲

貧と雖心小

足と欲多ハ

是と名て富

人と爲

是名て富



師の弟子に

訓不

是と名て破

戒と爲

富者ハ未必貴用 困

富りと雖心に 欲多ハ

是と名て貧 人と爲

貧と雖心小 足と欲多ハ

是と名て富 人と爲

是名て富

雅富人多欲是名爲貴人
雅貧人少欲是名爲貧人

金銀財宝多富と雖心小
足と欲多ハ是と名て貧
人と爲 貧と雖心小
足と欲多ハ是と名て富
人と爲 是名て富

師の弟子に訓不
是と名て破戒と爲
師の弟子に訓不
是と名て破戒と爲

師の弟子と
呵責す
是と名て持
戒と爲

悪弟子と畜

師弟地獄

墮

善弟子と養

者

此の師弟地獄は、師の弟子を呵責す、是と名て持戒と爲す、悪弟子と畜す、師弟地獄、墮、善弟子と養ふ者、

此の師弟地獄は、師の弟子を呵責す、是と名て持戒と爲す、悪弟子と畜す、師弟地獄、墮、善弟子と養ふ者、

此の師弟地獄は、師の弟子を呵責す、是と名て持戒と爲す、悪弟子と畜す、師弟地獄、墮、善弟子と養ふ者、

此の師弟地獄は、師の弟子を呵責す、是と名て持戒と爲す、悪弟子と畜す、師弟地獄、墮、善弟子と養ふ者、

此の師弟地獄は、師の弟子を呵責す、是と名て持戒と爲す、悪弟子と畜す、師弟地獄、墮、善弟子と養ふ者、

此の師弟地獄は、師の弟子を呵責す、是と名て持戒と爲す、悪弟子と畜す、師弟地獄、墮、善弟子と養ふ者、

師弟地獄に



教不順不弟子

不順教者、身可返父母

童子余甲

社

可早父母不返

和不者と寛

んと擬と成て

怨敵と成て

害と加ふ

悪人不順て

避不バ

縹犬の柱と

廻が如し

哲人不馴て離

不バ

大艦の海に浮

が如し

善友不隨順

すど者

麻の中は蓬

の真るが如く

悪友不親近

すど者

不和者擬家成是敵加害

不和者之教訓よむむこそ悪縁をなす子とて

その親のれいかにせむしとて

み隙を敵のそくかりて害成るなり

擬すもて家成るなりとよを

なり擬ハ紙なりそのとて

順悪人不避縹犬如柱

馴悪人不離大艦如浮海

悪人不あてそののしとて

不離はがら犬のしとて

我身とせむしとて

災難紙うけりなり

身の大なる力あると

とて佛本行集紙に

不和者擬家成是敵加害

不和者擬家成是敵加害

不和者擬家成是敵加害

不和者擬家成是敵加害

童子餘師

凡

藪の中は前
の曲る如し



相と離て疎

師小付

戒定恵は

業と習

根性ハ愚鈍

なりと雖

好バ自學位小
致



中なる悪人小きとあるは戒の申すところなるを
 癡ふつとせしむるに在るのなり人もそのよくある人
 ありてをばあぐらふもするさふなるなり又ありては
 ちかみちるくとも戒の中よする所の戒のさふする
 づいこのづらうもまかりゆくとたふすの孔子曰
 已不不知者と友するはまじき事なりと戒にせしむる
難は有疎師も戒定業
根性は愚鈍好自學位
 但の字は余初ふ父の答なりとあり初はたあらざる也
 あまんとづらふかざりてまらんといふことと戒にせしむる

疎師小付はたあらざる也と戒にせしむるは師の師也と
 づらふかざりてまらんといふことと戒にせしむるは
 初小付はたあらざる也と戒にせしむるは師の師也と
 専戒するのてありては戒にせしむるは師の師也と
 戒ゆせぐありのともくありては戒にせしむるは師の師也と
 ちかみちるくとも戒の中よする所の戒のさふする
 づいこのづらうもまかりゆくとたふすの孔子曰
 已不不知者と友するはまじき事なりと戒にせしむる
 中なる悪人小きとあるは戒の申すところなるを
 癡ふつとせしむるに在るのなり人もそのよくある人
 ありてをばあぐらふもするさふなるなり又ありては
 ちかみちるくとも戒の中よする所の戒のさふする
 づいこのづらうもまかりゆくとたふすの孔子曰
 已不不知者と友するはまじき事なりと戒にせしむる

一日一字と

學まなぶ百ひゃく

三百六十

字じ

一字千金いちじよちん

當あた

點多生てんたせい

助すけ

覺かくの字じと筆ひつ者しやのの書かままるるのの佛ぶつのの後ごと覺かく後ごと
いいのの天てん空くうにに佛ぶつ池ちのの文ぶんのの内うちにに書かくく覺かく後ごと覺かく後ごと

一日字一字二百六十字

一字書百千金一長兩多生

一果いち一いち字じ僅ひん々んももひひたたががててもも一いち年ねんににはは百ひゃく六む十じゅう字じ
なりなりかかるる一いち本ほんにに書かくく文ぶん字じももふふゆゆええんんすすままどどききののこころろなりなり
但たりりののああららとと六む年ねんををりり來き來きれれ生せい春しゅんすすてて一いち年ねんのの日ひをを
ここととむむるるすすままとと一いち百ひゃく六む十じゅう字じのの日ひををすすてて六む年ねんををりり書かくく分ぶん
すすままとと一いち百ひゃく六む十じゅう字じのの日ひををすすてて六む年ねんををりり書かくく分ぶん
ととのの又またもも一いち百ひゃく六む十じゅう字じのの日ひををすすてて六む年ねんををりり書かくく分ぶん
ととのの又またもも一いち百ひゃく六む十じゅう字じのの日ひををすすてて六む年ねんををりり書かくく分ぶん



東とう政せい之之後ごとといいててああままにに紙し共ぎ十じゅう年ねん代だいののちちかかままででののままままんんと
いいひひ一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんとといいひひ一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
たたままにに一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
かかららとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
をを一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
書かくく紙しにに一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
金きん紙しももああららはは書かくく一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
くくわわらら一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
呂りょ氏し春しゅん秋しゅうのの書かくく一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
書かくく奉ほう賢けんがが傳でんふふ一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
ゆゆののままままんんとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと
一いちとといい字じ同どうのの道みち六む六む十じゅう字じののままままんんと

観音の
師教の
すめふ



観音ハ師教

の爲に

寶冠ハ彌陀

と戴く

勢至ハ親孝

の爲に

頂ハ父母の

骨と戴く

宝瓶ハ白骨

と納む



宝冠ハ
師教の
すめふ

師教のすめふは父母の骨を戴く事なり
師教のすめふは父母の骨を戴く事なり

師教のすめふは父母の骨を戴く事なり
師教のすめふは父母の骨を戴く事なり

師教のすめふは父母の骨を戴く事なり
師教のすめふは父母の骨を戴く事なり

師教のすめふは父母の骨を戴く事なり
師教のすめふは父母の骨を戴く事なり

親孝の爲に宝冠戴彌陀

親孝の爲に宝冠戴彌陀

親孝の爲に宝冠戴彌陀

親孝の爲に宝冠戴彌陀

親孝の爲に宝冠戴彌陀

親孝の爲に宝冠戴彌陀

親孝の爲に宝冠戴彌陀

親孝の爲に宝冠戴彌陀

師教の
すめふ

師教の
すめふ



朝ふハ早起て
手と洗
意と撮て經
書と誦せよ
夕下ハ遅く寝
て足と酒
性と静て義
理と案ぜよ



習讀ともし意ハ
入不バ
酔寝て調と語
が如ク

と云ふは、この世にありて、
上の文、父の骨、或は載すものにて、又下、
骨、骨をばむらひ、
文章は、多し、
恩と云ふ、
孝の考、
文章は、多し、
恩と云ふ、
孝の考、

朝早起洗を、
夕遅寝酒を、
性静義理を、
習讀入不を、
酔寝調語を、
が如く

と云ふは、この世にありて、
上の文、父の骨、或は載すものにて、又下、
骨、骨をばむらひ、
文章は、多し、
恩と云ふ、
孝の考、
文章は、多し、
恩と云ふ、
孝の考、

朝早起洗を、
夕遅寝酒を、
性静義理を、
習讀入不を、
酔寝調語を、
が如く

千巻と讀も
復不

賤無して町
臨如



衣と薄する之
冬の夜も
寒と忍で通
夜誦せよ

食小乏之夏
の日も
飢と除て終
日習

酒不酔ハ心狂
亂す
食過るハ學
文不倦



習ふの字に廣類小字たりとて...
しもその代埋と意下し...

てさうに...
おろし元次山...
ホとのや...
かたさ...

冬夜を忍び通す
冬夜を忍び通す
冬夜を忍び通す
冬夜を忍び通す

夜ともう...
書物とよめ...
うと...
て日の...

酔酒心狂
食過るハ學

酒の味...
酒の味...
酒の味...
酒の味...

華三 餘師



身と温ふす

睡眠と増

身と安んず

懈怠と起



因縁ハ 夜半の 月



匡衡ハ夜學

の爲小

壁に鑿金で月

の光と招



私すものゆへに私にふりまをりてつとむり
あふふま一むむ一作不食すむむあふりゆり
かむか懈えとあふりまりのるむむのたけのふ
ハわくまふふふまふふむむむむむむむむむ

温身増睡眠安身起惰を

睡眠とハ玉著不睡いぬむむむむ眠むむむむむ
あふりまむむむむむむむむむむむむむむむ
とととととととととととととととととととととと
まむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
かむかむかむかむかむかむかむかむかむかむか
私む私む私む私む私む私む私む私む私む私むハ

上代とととととととととととととととととととととと
患むむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
いむのふあふむむむむむむむむむむむむむむ
てあふむむむむむむむむむむむむむむむむむ
懈むむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
云懈えとととととととととととととととととととととと

匡衡為夜學 鑿金取月光

史記列傳むむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

餘師



孫敬の
母の
るを
甲て
を

孫敬ハ學文の
爲ト
戸と閉て人と
通不



蘇秦ハ學文
の爲ト
錐と股に刺て
眠不



ひりとかけて書きしむるの家々々々書かぬまに
をわらるる人の中にも匡衡の家もやとて耕作し
かつてわらぬとてさうさういふまに人々々々
は色々匡衡がやとてわらぬまに書かぬまに
るりとて人々々々の中にも書かぬまに
はのふせふをまもるる書かぬまに書かぬまに
みくすのまに書かぬまに書かぬまに書かぬまに
びと月のふせふをまもるる書かぬまに書かぬまに

孫敬ハ學文の爲ト

楚國は頃侯はあつて孫敬はあつて文字はあつて楚國の
人々の學問をよびて人々々々書かぬまに書かぬまに

蘇秦ハ學文の爲ト

史記に記すに蘇秦はあつて文字はあつて蘇秦はあつて
戰國策に記すに蘇秦はあつて文字はあつて蘇秦はあつて
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに
はとめて家々々々の中にも書かぬまに書かぬまに



俊敬ハ學子文の

爲ふ

繩と頸不懸て

賊不

車胤ハ夜學と



好んで

螢と聚て燈

爲美

足のきくところとせり血をきき足ふとまきつすの
日のかげのきくともたけとてまげと名をたふつのがくんの

からけりて濟まふは久延相の官ふる見りかくて
換秦六國の諸侯さちより印書とさるる是と佩

家よりうふわにありはもち千里をむらひふゆらうが
穂秦あふふあむむひまのさきまひみすじあを

すくもりびぐのまむらひふむらむらむらむらむらむら
ひふあんとそのま延相の官ふる六國の諸侯の印と佩

てさるる名は天下あむむむむむむむむむむむむむむ
かきとれむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

いしくむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
しとむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

俊敬ハ學子文の繩と頸不懸

俊敬ハ學子文の繩と頸不懸と屋のさる
先賢傳ハ孫文ががんとまむらむらむらむらむらむら

ちりむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
あむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

車胤ハ夜學と好んで

昔書ハ車胤のむらむら武子のむらむら南平のむらむら
かむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

あむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

これに於て後わたりはゆふ家々學を學ぶ者も亦いふに似たり
中にもとて文程よりいへりかたき漢の参公をこそ

劉寔は衣と誦書も不息

劉寔は衣と織
作
口小書と誦
て息不

廣漢記東易府の人物を記すに晋の劉寔おごるに
子真とて高唐の令り家子に成平の教を授け
成りて博學にして司空に官するも崇讓海に
て成つるを世の風俗と矯るに 乃上オて死すといふ

倪寛は耕種と文不捨

倪寛は耕作
作
腰小文と帶
て捨不

漢書列傳李氏茂也循良名臣也其妻死すに倪の字
と兒をかけて音はくひよけのこをり韻府に倪寛といふ
この人六千衆の人有り孔安国より久て其問答つとむ
つとやまもして耕種するも腰小文と帯を以て紐とて

此等の人者 晝夜學文と

皆 晝夜學文と

好文で 文藻國家小

滿 遂碩學の位

小致 文章のかきけりてあやうに傳るゆふは文章のよき漢武
正韻をひく教所古の漢書の註ふかけりてあやうの



緞簪と密筒

と振と小

口小ハ恒小經

論と誦せよ

又引と削矢

と知と

腰小ハ常小文

書と楸

張議新古と

誦せよ

枯木菓と結

矣

張儀

新古

誦

誦

誦



誦

人ハ多ク其の存スルキ學問セシムル事ハ其の功也
の事且テ文章が固モ家ヲモシムル事ハ其の功也
みりど刻キ多ク天子もさしゆりハ文學の徳のたひ
みるなり碩學と碩大の義有り天子亦ハ其の功也

張儀集振筒口恒誦恒誦

又利引削矢腰書と楸文書

筆ハ字彙の說とカキテ其と以テ相塞と云塞と云ハ
の事其の石双と云ハ其の事也其の事也其の事也
と云ハ其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也
性も其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

矢と楸と云ハ其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

張儀誦新古枯木菓結

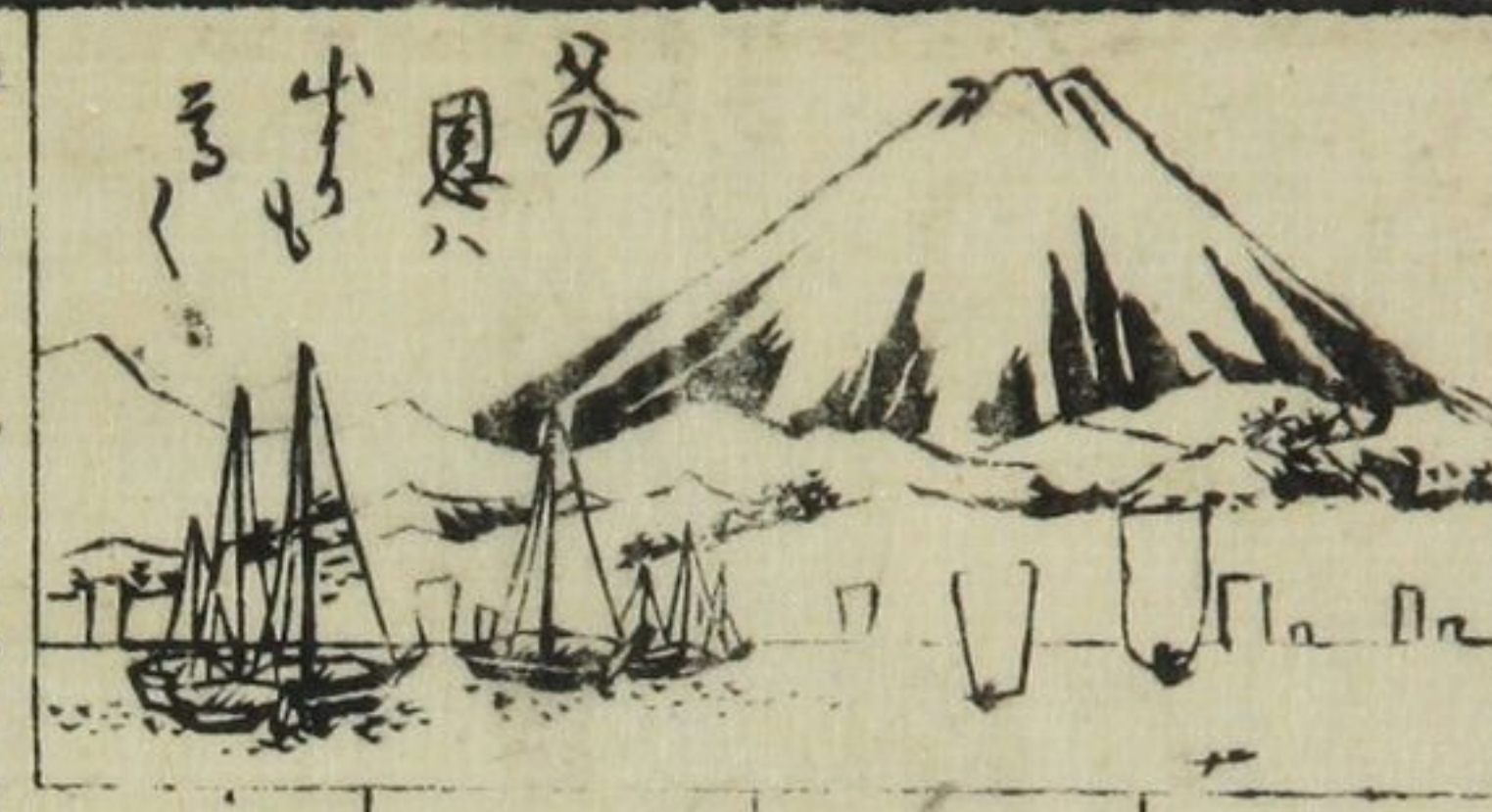
史記列傳と按むる事張儀ハ魏合ハ其の事也其の事也其の事也

師と云ハ其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

張儀誦新古枯木菓結

かくは其の事也其の事也其の事也其の事也其の事也

猶光音天の如



父の恩ハ山ノ高

一統曰星子の童子おん八女の修文をうせり去るをこし
 おのひまらとせけや筆者の保り世世者の心ゆきとせり
 ○愚をばかふ人として註すは儒者も習君もた憂す人
 ハ懼るはとるる愚者の煩惱よせり自まつての憂わね
 智者ハ佛たてあきむるゆつて不歡樂すまきり
 のしるり玉著ふちりせり因の字を六字に果し選んか
 光音天の色界十八天の第六の天を梵語より阿婆
 今と云ふにす光音といふなり名義集より又後義
 湖洲の四女儀の集解ハ光音天といふ天のついでなり
 光音といふ音のついでなり新説ハ光天といふなり

父恩高た山頂山山為下

母德深た海滄溟海還淺

須彌山尚
 下
 母の德ハ海に
 深
 滄溟の海還
 淺

こまらりの下すたるのあごハ父母の恩もつてもつたる
 一統をす心比銀鏡を慈父の恩をこし須彌山玉の如
 悲母の恩深と大海の如き世世の徳も二劫二劫も
 徳をさけりるる海深と大海の如き世世の徳も
 天竺の如きとてなり梵語ハ蘇迷唐といふとて
 処をいふなりなりとてなりなりなりなりなりなりなり
 たうとて百二十去万里なりとてなりなりなりなりなりなり
 とあり又長河合經起世經に云く八万四千由旬
 とはのの説ふ十六万由旬のさけりるなりなりなりなりなり
 儒の中ハ須弥といふ別なり須弥ハ解字ハ崑崙山といふ





胎外むすこ生まて數かず

年とし

父母ふぼの養やしな育やしな

と蒙あま



昼ひる者もの父ちちの膝ひざに

居ゐて

摩ま頂たうと蒙あま

多おほ年とし

夜よ者もの母ははの懷なごみ

に卧ふて

乳ち味あじと費つぎ

數かず斛はく

朝あさふ八やち山さん野の子こ

蹄ひづりを殺ころす

妻つま子こを養やしな

おれた母はあつたかたをさしおきかたをまきせりまのやうにさし
たるとさしおきのまゝのあつたかたの恩をさしおきかたにさし

胎外生て數年父母の養育

胎外むすこ生まて數年とし父母ふぼの養やしな育やしな

胎外むすこ生まて數年とし父母ふぼの養やしな育やしな

胎外むすこ生まて數年とし父母ふぼの養やしな育やしな

胎外むすこ生まて數年とし父母ふぼの養やしな育やしな

昼者居父膝に摩頂後年

夜者母懷に卧て乳味と費數斛

昼ひる者もの父ちちの膝ひざに居ゐて摩ま頂たうと蒙あま

夜よ者もの母ははの懷なごみに卧ふて乳ち味あじと費つぎ

數かず斛はく

朝ふ八山野子蹄を殺す妻子を養

暮天江海干
臨て
麟と漁て身
命と資



且暮の命は
資鳥ふ
日夜悪業と
造

朝夕の味と嗜
鳥に
多劫地獄ふ
陸
恩故戴て恩と
知不ハ
樹の鳥の枝
と枯グ如
徳と蒙て徳
と思不ハ
野の鹿の草と
損ちる如

暮天江海干
臨て
麟と漁て身
命と資

わくまふ山岩に
まごころの洪武
そのふらう又
今のたごひ
いのちひたす
悪業とくまか

為資鳥命日夜造悪業
の味朝夕味多劫地獄

且暮の命は資鳥ふ
日夜造悪業と
造
鳥に多劫地獄ふ
陸
恩故戴て恩と
知不ハ
樹の鳥の枝
と枯グ如
徳と蒙て徳
と思不ハ
野の鹿の草と
損ちる如

載恩不貧
樹鳥枝
敬徳不野鹿損草

人の恩に
すまらざるもの
枝と枯わ
草



酉夢其父と

打

天雷其身と

裂



西
天雷
列

班婦其母と

罵

靈蛇其命と

吸

郭巨ハ母と養

はんう爲ふ

穴を掘て金の

釜と得たり

神小恩依知ざるもの多し故死小過とあり又人々を
極きてそれと他ともあはぬかぬ六世の事なること
その時の事依る人なるが如し一より智夜福小恩依
あつる人の畜生なり一と一と

酉夜打てて父天雷撃其身

此家求吉凶録若録よのきより酉夜ハ唐の世の人なり
を生つた不孝なりゆかりに極よりのそまふうをるる父
いうそちちちちち一ハ六酉夜打ちちち林とて父の
いふとるる父の死天よりかきこり地を人地とてさ
雷その家よちちちハ酉夜とて入てそのあつゆり
その死骸とてたててたのまふおとる人あつゆり

班婦罵る母靈蛇地及其命

漢師正う括異記よ班婦の事ハ才幼鏡山ハ唐の事
つハ班婦を罵りいうしりあつた漢山の巴蛇とて
班婦とていふもの罵るとハ正勳ハ悪言あり聖書の
といふこととちと悪口一とつものあつた

郭巨ハ母を養はんう爲ふ

孝子郭巨の事ハ郭巨ハ後漢の世の人なり其母が
ゆかりに郭巨の母とてその事ハ其母を養はんう爲ふ

童子餘師



妻詩自婦と
去て



水と汲
小泉と得

あるは母命をわたりて孫ふらせり 郭巨の妻
 うらたのやうな家すがーんをばねと申すは
 とらうとて母をばねと申すは 郭巨の妻
 みづをばねと申すは 郭巨の妻
 とわつて二尺の戸つて申すは 郭巨の妻
 らうの銘なり 天賜孝子 郭巨官不特奪金
 とあるをりのみあり 郭巨の妻
 たりわらばまーんをばねと申すは 郭巨の妻
 實と申すは 郭巨の妻
 四外あり 郭巨の妻

妻詩自婦と

後漢書よこりて 郭巨の妻
 こつてのちて考ひたり 郭巨の妻
 志うる小姑の勝とて 郭巨の妻
 河のありとす 郭巨の妻
 あはれをばねと申すは 郭巨の妻
 妻をばねと申すは 郭巨の妻
 夜小姑をばねと申すは 郭巨の妻
 としと名とす 郭巨の妻
 老婦をばねと申すは 郭巨の妻
 志と名とす 郭巨の妻



孟宗竹中
哭て
深雪の中
筍と拔



王祥歎て氷
叩バ
堅凍の上
魚
踊

いふもあまきしむるにそのおちるのふも水とせせたるがぬう
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきんきん
いづもつとていづもつとていづもつとていづもつとていづもつとて
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
故事に漢書に揚叔が典書にそのせきりうの書にまき
美御堂のいと遊とあやし

孟宗竹中泣く筍を抜

晋張方楚國先賢也ふみさう孟宗が母年とすたの
めも母の死とのち目ごりまうとてあつとまんたんともいふと
時よまの節おゆと中お筆せんとさうもあつとまんたんともいふと
のちやいづもつとていづもつとていづもつとていづもつとて

あつとまんたんともいふと
あつとまんたんともいふと
○又異説や孝子修孟に孝武とて孝武のひさり
母よはつていづもつとていづもつとていづもつとていづもつとて
つとまんたんともいふと
竹よすからとて孝子修孟に孝武とて孝武のひさり
あつとまんたんともいふと
あつとまんたんともいふと
あつとまんたんともいふと

王祥泣く氷堅凍の上魚

晋書の列伝ふ王祥字は休徴とて琅邪臨沂の人
るり継母をまうつて子とわらふとすま王祥といふ孝子とすま



養子盲父と

涙泣まじく六兩
眼と開

刑渠ハカ母と



父母の一人は失明の夜のおびとを養子として湯屋敷に
すまわすおちるぬるる養子の女房と抱きあひあひんを
こみあひて居るは王様まゝの伝言をいひてさうかく
勇気りといふるふとちまち氷水のづらとをちて二枚の紙が
わたりぬるちまひたりて中をぬすむる又養子とてはまの
まのりぬるすまののわづらるとそのまをいひて七寸紙を
懐のまふ入て居るは母ふまふりまのこの人かたの
こまふま養子のかゝるまふりまのこの人かたの

古事との書の中ふ養子の伝言は継母人間有ま
天下に至る今河水上一片月氷横るの伝言のまふりま
必紙のまふりまの川のまふりまの王様の御まふりまの
まふりまのまふりまの川のまふりまの王様の御まふりまの

養子養育父涙泣く因る暇

養子養育父涙泣く因る暇
養子養育父涙泣く因る暇
養子養育父涙泣く因る暇

とてあるは養子養育父涙泣く因る暇
とてあるは養子養育父涙泣く因る暇
とてあるは養子養育父涙泣く因る暇

とてあるは養子養育父涙泣く因る暇
とてあるは養子養育父涙泣く因る暇
とてあるは養子養育父涙泣く因る暇

とてあるは養子養育父涙泣く因る暇
とてあるは養子養育父涙泣く因る暇
とてあるは養子養育父涙泣く因る暇

とてあるは養子養育父涙泣く因る暇
とてあるは養子養育父涙泣く因る暇
とてあるは養子養育父涙泣く因る暇



刑渠ハ老母と
養て
食と嗔を
若成

たやりの警斐子の死せる故に又家とて申すは
あまの命とてつめたるうんたむのりたるの命のうんたむ
病まげて代困へにけしりや不寐のうんたむとて母まて
がて死とて孝とてすべしとて孝とてすべしとて孝と
そりけいのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
昨日井汲のうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
母は母のうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
そりの家の井汲のうんたむとて孝とてすべしとて孝と
耕するのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
ゆまのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
ゆまのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
ゆまのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
ゆまのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし

その孝のゆえのうんたむとて孝とてすべしとて孝と
たびくるの警斐子の死せる故に又家とて申すは
とまをば母のうんたむとて孝とてすべしとて孝と
父のうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
せれとのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし
かむのうんたむとて孝とてすべしとて孝とてすべし



董永ハ一身と賣て

孝養の御器不備



揚威獨の母と念て 虎の前小啼 一六害と免



と小まづづらうとてのちにおも母と病む夜と
ねがして看あせり冬に麻とあての裏ゆるとむの胡の
つらむぢもひとての子にあのみ世に食物成るるも
年七十をりある由もとてつらむとてつらむとてつらむ

董永賣身 父を養ふ 養子也

孝子傳 董永ハ漢人なり家まづ貧しく令やとて耕作
せしりある日ひつらの父を車におせりひきあせりつらむ
とむりて父死しつらむの病むも命をうけつらむ
そよより父を葬れしつらむとて死なせりひきあせり
むすのかさむりつらむとてつらむとてつらむとてつらむ
そよより董永主人のつらむとてつらむとてつらむ

とつらむとてつらむとてつらむとてつらむとてつらむ
三百匹のかりとつらむとてつらむとてつらむとてつらむ
つらむとてつらむとてつらむとてつらむとてつらむ
天のつらむとてつらむとてつらむとてつらむとてつらむ
とつらむとてつらむとてつらむとてつらむとてつらむ

揚威念獨母 虎を啼免害

李朝 揚威が忠孝は國譽 揚威とてつらむとてつらむ
虎とせりひつらの虎とてつらむとてつらむとてつらむ
つらむとてつらむとてつらむとてつらむとてつらむ
つらむとてつらむとてつらむとてつらむとてつらむ

顔鳥墓の土を
負バ
鳥鳥来て運
埋



許孜自墓と
作

松柏と植て墓
と作



顔鳥墓有土鳥來運

廣興社の十金花殿の人物敷小漢の顔鳥鳥傷ふふとまの
命り死て土はわく墓ははく鳥むふりまう玉とく
そこのふ墓まふまふのあやうらばまのあやうらば
あやうらばあやうらば鳥傷ふふとま大明一統志に金花殿の陵
墓類とありまふとま顔鳥鳥墓とのせうまの註とまふ
義鳥鳥墓とありまふとま四里まふとま石碑のまふとま
はま大成の異苑部ま東陽の教鳥鳥向や又鳥傷ふ
ゆりまふとま墓あやうらば鳥孝ふふま鳥鳥孝行のまふとま

許孜自墓松柏植て墓

氏族琳韻小晋の許孜のまふとま季義とあり東陽の人
二親死てのち小孜とありまふとまのあやうらばまふとま
墓と墳墓ははくまふとまのあやうらばまふとま松柏のまふとま
許孜のまふとまははくまふとま四日まの焼まふとまのあやうらばまふとま死
小ふらと廣樂記にまふとまの孝行と感てまふとまの里は
孝順里とありまふとま大明一統志南越志とありまふとまの
あやうらばのせうら又排韻小晋の元康年中小孝行とありまふとま
まふとまははくまふとま天子とありまふとまとまふとまとまふとま
りありまふとま孝行のまふとまのあやうらば天子とありまふとまとまふとま
あやうらばとありまふとまのあやうらば許孜のまふとまのあやうらば世間流布のま
小件物とありまふとまのあやうらば童子とありまふとまのあやうらば文のまふとまのあやうらば松柏
植て墓とありまふとまのあやうらば松柏とありまふとまのあやうらば松柏とありまふとまのあやうらば

煩惱の身ハ
不淨有り

速小菩提と求
可



厭てと厭可ハ
娑婆有り
會者定離の
苦有り

思てし思可ハ
六道有り
生者必滅の
非心あり



壽命ハ蟬蟻
の如し

煩惱の身ハ不淨有り

速小菩提と求可

厭てと厭可ハ
娑婆有り
會者定離の
苦有り

思てし思可ハ
六道有り
生者必滅の
非心あり

壽命ハ蟬蟻の如し

壽命ハ蟬蟻の如し

壽命ハ蟬蟻の如し

童子餘師

七十六

黄金珠玉只一世財寶

黄金珠玉
只一世の財寶

榮花榮耀

更不佛道の

官位罷職

唯現世の

海より採られたる珠玉は只一世の財寶なり。其のちの世に重宝とならば、珠玉のたぐひは只一世の財寶のたぐひに非ざる。其のちの世に重宝とならば、

すなわち儒に金銀財宝は只一世の財寶なり。其のちの世に重宝とならば、

わが世に重宝とならば、其のちの世に重宝とならば、

其のちの世に重宝とならば、其のちの世に重宝とならば、

其のちの世に重宝とならば、其のちの世に重宝とならば、



龜鶴之契と

致し露命の消不



致し露命の消不

契とては、露命の消不、其のちの世に重宝とならば、

其のちの世に重宝とならば、其のちの世に重宝とならば、

其のちの世に重宝とならば、其のちの世に重宝とならば、



鸞鶴之念と
重しと
身體の懐不
間



切利麻手尼の
殿も
遷化の無常
と歎



蓮子
繪師

金瑤あつく絶情う増せぬさすかかゆふのちを
て死するはしれ氣あふあたまさすさすら次のもの命
人のいけちのあかるたはゆのりさまたさすのう漢文
薙上のあかるたの和文とて薙花のはゆれさあまらご
漢書撰武竹ふふ八初まゆの如く絶情百千方のあまら
らんちりさるさあまの命へ活してあまらごらるさ

重き考考と金身體不懐間

鸞鶴の念と重しと身體の懐不間
たふはとて去る考考は相離す人共と推す六八相思
て死するとは氣あふあたまさすさすら次のもの命

切利麻手尼歎遷化考

切利麻手尼二天のときり後法師の補注ふ三十三天の
とらぐくのせむとてまけむとてあまらごらるさ
の薙髪ふ切利天須弥山にまらるさあまらごらるさ
天王の帝釈ふあまらごらるさとてあまらごらるさ

二二七



大梵八高臺の
閣おも
火血刀の苦を
悲し

摩訶尼如來教のよきものなる因陀羅網の如く網
とかけらるるのまがらとくともあつて放るる心摩訶尼如
深は大師の教心界を要集す因陀羅網の互に相影現する也
とのいふに正なり又難空藏經に命終て二十三天の摩訶尼
文嚴中ふせたるに依はばまの教ふれども法華に至ると文を
是化のまがらとくは生に要集するの初利天のおとくは樂三
まやなりといふと縁命終の時の難のいふはたのたの
ののすともまらむむむむむ天衣塵垢よけむるるるる
このまがらとくはあせりつ四の八の目とくまはくあり
るるるるるとまがらとくまがらとくまがらとく

大梵も志空悲火血刀苦



大血方の
須達之十
徳も
無常於留
無

大梵と大梵補天のまがらとくは揚容あり大梵天と名づくは
舎の疏とくまがらとく火血刀とくは三途をのまがらとく
縁と大達たのまがらとくは魔鬼と刀途道とくはけ畜生
と名づくあせりつ三途のまがらとくは二毒とくは
地獄より刀途へ懐念ありて魔鬼より血途へ愚癡なりて畜生
るるる三藏法教のまがらとくは又畜生畜生不令通今紀に地
獄の日夜もゆるゆるとくは火のい魔鬼の草と名づく刀とくは
たふゆるがしむ畜生たひ肉とくは血とくはゆるゆるとくは
須達とくは長者のまがらとくは後長者の長者須達とくは
達とくはとくはとくはとくはとくはとくはとくはとくはとくは

須達之十徳言回杖を常



阿育之七寶
壽命於買
無



月支の月と還
王の使
縛被

りてして六姓をくしてうちをあらうとてなすは二つにたつては
経るべきはりてして大衆してさうなるるはたの西へ八國後

とておのれはつたそのまゝに智深くしてあつたそのまゝに年
智とて年七十五ありそのまゝに八の経緯とてあつたそのまゝに

いふにこれゆとてそのまゝにそのまゝに九つと敷とてかか
せんとむらむらとていふ十つと下ゆとてそのまゝにせとて

あのでくは十種はそとて人ふそとてなうせとてそのまゝに
者とてそのまゝにそのまゝにそのまゝにそのまゝにそのまゝに

阿育之七寶と壽命は其命

阿育の天竺にありてそのまゝにそのまゝにそのまゝにそのまゝに
七宝といふは金銀銅鐵石玉白象牙珊瑚七種の宝をいふ

ゆふふ方四千の隣とてはそとて八方四千倍にふたふ
去つたけを日敷とていふ阿育王は塔を建ててそのまゝに

偈翼考ふ小志のせり阿育王はかたてどくたつてそとて
とていふとてそのまゝにそのまゝにそのまゝにそのまゝに

月支の月と還王の使縛被

月支といふは天竺の北の邊にありてそのまゝにそのまゝに
法向壁喻は下梵土四兄弟ののりてあつてそのまゝに

七日のむち回ふそとてそのまゝにそのまゝにそのまゝにそのまゝに
きしてそのまゝにそのまゝにそのまゝにそのまゝにそのまゝに

阿毘達磨

人布施と行

可

布施ハ菩提

の糧ハ外

人最財と惜

財寶ハ菩提



若人貧窮の

身にて

布施す可財

無んハ

他の布施する

時と見

随喜の心と生

阿毘達磨の格より火きるハの類六十四の角の角の格より火きる
ゆその大化して力強くなり阿鼻獄に落ちる

人最財と惜財寶ハ菩提

可

布施ハ菩提

の糧ハ外

人最財と惜

財寶ハ菩提

若人貧窮の

身にて

布施す可財

無んハ

他の布施する

時と見

随喜の心と生

不けんきうなるといふことすなりん佛在世の分員女の心の心
となりて佛の一灯位を金六日とも須弥灯光如ま記の授

悲心一人不施

悲心一人功德如大海

如く 功德 大海の

如く 功德 大海の 功徳 大海の

已が爲不諸
人ふ施バ

己が爲不諸 人ふ施バ

報と得と成

報と得と成

子の如く
砂と聚て塔と

子の如く 砂と聚て塔と

為人

早黄金の層

早黄金の層

と研



花と折て佛

供する輩ハ

供する輩ハ

速不蓮臺の

速不蓮臺の

踏と結

踏と結



踏と結



件と候おれは直ぐあつて金銀もあつて糸者の若くは
蓮華もあつたと結とていふ

一句信受の
力

一句信受力。如轉輪王位

轉輪王の位

半偈聞法

に超る

三千世の寶

徳と

三千世の寶

に勝る

と云ふ所の勝れぬと云ふ人など此世にあらざらんハ
佛のありし時集りて佛の位にあらざらんハ佛の位に
あらざらんハ佛の位にあらざらんハ佛の位にあらざらんハ



上八須佛道
と求須

上須求佛道中七報四恩

千の須弥山を四半に天下四千の大地半は悪千の閻羅
千の四天下千の劫千の梵天とていふは小千世界千
とていふは大千世界とていふは中千世界千とていふは大千世
界とていふは三千大千世界とていふは阿僧祇劫とていふ

童子 余 市

畫工

作者 蕙齋善次郎

画工 同(下)の(白)

天保十五甲辰正月

不坂山

横山町三丁目

和泉屋金右衛門

東都書肆

本銀町河岸

山城屋新兵衛

和泉田築敷大區四小區

泉郡

山谷村

石坂樂天齋

